

「食べたらず掛けるぞ」

パンを齧りながら清瀬はその宣言する。機嫌の悪そうな清瀬に逆らうことなく走は頷く。

「どこに行くんですか」

「まずは俺の服を調達しに行く」

「えっ、じゃあさっきのは何だったんですか」

最初から着替えるつもりだったのなら、あれだけああでもないこうでもないとしていたのは何だったのだ。

パンを両手に持ったまま、清瀬は呆れたように走を見た。

「これは最低限女の子としておかしくない格好なだけだろどう考えたってデート向きの服じゃない」

「はあ……」

もともと自分の服装にもあまり興味がないし、女の子の服装なんてさっぱりな走はそう答えるしかない。清瀬もそれ以上何か云うことはなく、食事を終えるとふたりはそれぞれ寝室と台所を片付けた。

さあ出掛けようかと玄関までくると、清瀬は今度は靴で悩み始める。あれこれ足を入れてみるも当たり前だがどれもこれもぶかぶかか、どうせ履き替えるからいいか」と自分に云い聞かせるようにして清瀬は結局ビーチサンダルに華奢な高足を差し入れていた。

鍵をかけ、エントランスを抜け、近所の総合スーパーに向けて

歩き出したところで走の左腕に清瀬の身体が絡みついた。腕を組むなんて生易しいものではなく、殆ど走の腕を胸に抱きかかえてしまっている。「ちよっ」と大きな声を出してしまい、走は慌てて声を潜めた。

「なにするんですか、離してくださいよ」

小声で抗議するも、走の腕にびったりと身を寄せた清瀬は「こりと走を見上げてくる。」

「なんでも云うことを聞くといたくせに君は腕も組ませないつもりか？」

「いや、これ、腕を組むってレベルじゃないし」

「腕も組ませないつもりか」

「……………いえ……………いいです、なんでもありません」

走は清瀬から目を逸らした。

その後の十五分間の道のりを走はあまり憶えていない。普段人前で手を繋ぐことは出来ないし、学生の頃は人目を気にせず手を繋ぎたいと願ったことも確かにあったのだが、走は夢が叶ったと素直に喜ぶことは出来なかった。

先程走が離れてくれと懇願したのは少女になった清瀬が嫌だったからではない。あんなふうに裸で抱きつかれ続けたら何をじでかすか解らない、つまり自分の理性に自信がなかったからだ。